

205346-000-8

41-93

夢宅日記

桃沢 夢宅/著

[出版事項不明]

EDV-0530



夢宅日記

嵐山にあそぶ

春のわかれをしみがてら、あらし山の若葉見にゆかむとて、おまじ心におもひたちける人々、あやにうちあひて、さはり出来にけり、中にしげのふ、

さくら花ちりにし後をとほれずはあらしの山のかひやなからむ

君だにすぐし給ふなど、いひおこせたりけるに、やみなむもくちをしさに、俄になはかすをそゝのかすに、文の奥にかきうへたる、

時鳥なかじはあらしとおもふまでことしはいたく夏めきにけり
これもことかたに契ありとてゆかず、かへし

今はとて若葉見にゆく君によりなかずはあらしやまほとゝぎす

さるほほに、今はたゞ二人ばかりになれ、ばいとさうとくしくて、わびしけれを、又はゆくべき日もなければとて、やゝ晝すぐるころよりたち出でぬ、ときはの里のわたりすぐる時むたく

うちかすむらにひばりはきこゆれを、野にも山にも春予殘らぬ

夢宅日記

(一)

かげき

ふちなみの花ちる里を來て見れば春すぎにたるこゝちこそすれ
 やがて嵐山もそこなめりまづやどりとりおきてのち見めぐらむはいかにといへ
 ばしかなむ花のころよりちぎりおきつる宿こそあなれとて川づらの家にたち入
 りてどかくいふめれをいかなればやきゝ知らずそらおほれする氣色なりけりど
 もにあさましうおもへどせむかたもなくさらばとて嵐山のをよりわけ入りて證
 菩提院といふ寺にやどるいりあひの鐘あり出でぬすべて今日はくもり日にて雨
 も今々ど見ゆる空なりあるじの禪師にほとゝぎすをきゝ給へりやと問へばいつ
 も初音は松の尾の方に鳴くをのみきゝならひ侍るに今年いまだきゝ侍らずい
 つの年も此山のつゝと花おちつきてのちにこそ侍れいまだ盛なるにはきはめて
 おぼつかなしなといふさはれこのゆふべたゝならぬ氣色なり此花散らざらむか
 らになかじやはとて庭に出でゝ待ちをるにやはや今の一聲それなめりとうち驚
 くをこは水の聲にこそといへばいなや又こそなとしばゝいふにかげき
 山寺のかけひの水のこゑにさへまざるゝころのほとゝぎすかな
 さるわひだにくゝと二聲ばかりいとけぢかくなきたるに我も人もおもひ定めて

いとうれしくたどへむものなし

をしければ人にはいはほとゝぎすみやまたづねてきゝし初聲
 とたからかにいへばあなごま又もこそ鳴けとしづめてひそみつゝかげき
 ほとゝぎすほのかになくをきく程は人さへ聲をじのふなりけり
 ちほ木がくれにうづくまりをるほとゝあまりに暗くなりゆくにたへでやをら板敷
 のうへにあがりければあるじのせじの出來たるにしかゝとさこゆれば
 一こゑり我にかたらへほとゝぎすよその人さへさゝつるものを
 あなねたしなとこちたきまでくゆめりさて題をまうけ出でゝ歌よむに春の暮の
 ほとゝぎすといふ心をむたく
 しのび音は今もあくなるほとゝぎすうつきたゝばと何思ひけむ
 あるじのせじ
 ほとゝぎすうれとも人にきこえしか春さへ今はくれあへぬまに
 かげき

ほとゝぎす今二日ばかりおくらせば世に聞く頃の初音ならまし
 あらし山にほとゝぎすをたづぬ

あらし山初はとゞぎすたづねきて開の木かげにまくらをぞかる
かげき

あらし山たゞ越にして越えゆかば今なく聲はさかきぞあらし
山寺にやどりて、ほどとゞぎすをきく、むたく

山寺に一夜ねてころはとゞぎすちりにけがれぬるはさくつれ
かげき

この寺の法のゆかりときかねどもこゝろをすますほどとゞぎす哉
またかのつれなかりし麓の里をおもひ出で、かげき

今ぞ知る宿をしみしは山にねてはつほどとゞぎすきけとなりけり
夜なかのころより、風もいたく吹き、雨もいみじう降り出でければ、今はとてふしつ、
何におく心なければや、いといたうねすくしたり、むたく

ることなき春のゆくへにあくがれて若葉の山にひとよねしかな
今日は、はた鳴くべくもあらざれば、空のはるゝをまちて、山をばくだりぬ、大井川の

むかひの岸に、松に藤ささかされり、むたく
あらしやま春のものとしてさく藤もやがて若葉のにはひなりけり

かげき

ろこひなき水にうつろふ花なれば藤波としもいふにやあるらむ

あはれ花のさかりには、いちくらのごとつとせひし人も、いづちにかいにつらむ、ろの
なごりだに、見えすなむ、おはかた世はかくろありける、かげき

あわれなる花のさかかき空蟬のうきよにこれもさけばなるらむ
ならびの岡の北つらをすぐるどて、

ゆく春はこの岡べよりこゆあらしどもうぐひすの聲しきるめり
ひらのきたのゝ若葉も、いとよし、さて見ありくほどに、今日の日も暮ぢかくなりぬ、

故郷にあらへる

ことし長月十日あまりふつかといふに、都をかぞです、このよしいへば、京のひむか
しなる岡崎てふ里に、はやう澄月上人といひし法師のいましけるが、年ごる斯道の
親どたのみきこえ侍りし、ろのあとをものし侍りて、よとせいつとせすまひけるを、
のちのあるじとすべき人をなむ、かたらひおきて、さてこたび故郷へ歸るにぞあり
ける、それをきいて、京なるしたしきかぎりの人々、馬のはなむけにとて來ませり、そ
れくをかしき物もおくれり、又歌をも多かれと、ひとりにかへしよまむこ

どかたければ其人々に對してたゞひとつ、
故郷へゆくはうれしきたびなれどしばしも人にわかれむがうさ
またかけきの

しきしまのやまともる人おほかれどどかたらむは君ならで誰
とぞ侍りしこの景樹とは日ごる心おかぬとちにてどひかはしければおのづから
はらからのやうにおぼえてかへし

たちわかれきみかてかれはこのはの孤くさとわれはかりなむ
なぞきこえつゝわかれぬ又をとつとし故郷よりめののぼりけるをこたび具して
くだるに

君どちはひとつに出づる旅なれど我はふたりにわかれぬるかな
とあふぎにかきて賜へりかへし女

一人きてふたりしかへる旅されど君にわかるはかなしかりけり
又わがかたへは

ところときけど君いなばいな飯島いひぐさにせむ
かうおちやうはあふぎにかきてかへしよめれど今日たよりなければたゞかい

つくる歌

たちわかれいな山の山べにこもりさば君をのみこる戀つゝをらめ
これかれおくりせし人には粟田にてわかれぬ

みやこのみかへり見られて粟田山越もあへぬに日はたけにけり

山科へ出づればうこら田のもゝ刈わけて多がれめきぬあふさか山はぬかりて道
のあしければ小關とかいふを越えぬ大津へ出で、見れば馬士のつをひたるが馬
に乗れどしきりにいふめりどいせあまにもなりぬべしこのところにて馬に乗
りしお、うへなる坂中にておちし事をふとおもひ出でよ

むかし我おちしをおもへば大津馬の仕合よしは人にやよるらむ

これはこのところにては馬の具に仕合吉といふ事をなべてつくればいへるなり
やがて石場の濱べに來て見れば風もなきてみづらみの面はかゞみのやうなるを
かけうつる水の面には海こしのやまもみぢもちかく見えけり

いそぐ時には勢田の橋も長すぎたるこゝらす夕つかたすこししぐれければ雨こ
るもは着ぬほととなり守山にとまる

守山のさとゝ知るゝ宿かりてしぐれにうでをぬらしつるかあ

廿三日寅の時ばかり出でたつ、ありわけの月さやかなり、霜のしたゝかにふりて、風も吹けば、たへがたさに、ありとある旅の具をもとり出でて、うち着たるが、をかしければ、

神代にもためしあらめやてる月に雨ころも着てたびゆくひとはからうじてやす川に至りて見れば、水の流るゝが、三つにわかれて、橋も三つころありけれ、まだ夜もあけず、ふきおとさるゝやうにてこえぬ、

やす川とおとにはきけと瀬をおほみわたせる橋も越ずわづらふ

なほまだいと暗けれと、わが着たるものを人の見て笑へばぬぐ、むさの里ち川なとすぎで、やうやくわたゝかになりぬ、今日は道もはかどらずして、とりもとどまらる、

廿四日今朝も寒し、すりはり峠は、みづらみを見わたして、興ある處なれと、ひえこゝえたれば、たゝすみもあへず、うちこえてゆく、不破の關山を越ゆとて、

さを鹿のなくなる秋は、不破の關あれずはありとも淋しからまし

關のふちかはたえずしてとよみ給ひしも、此處と人のいひしが、ちひさき橋を渡したり、たるむといふうまやにとまる、

廿五日今朝もあひやどりせし旅人にもよほされて、夜ふかくたち出づるに、やがてあけにけるよと見えしは、霜のふりて何のうへも皆白きなり、御影寺といふ里にて日の出づるを見れば、海より出づるやうなり、これは山の遠ければ、たひらに見ゆるによりてなり、河渡といふは、八月稻の穂に出づるころ、なが雨ふりて大水出で、あふれたるが、目もおよばぬほどにひろがりて、ながれしあど皆青くまひなはかりの稻あり、はやかみより御めぐみの米、ふたゝび賜ひしとなむ、うれはしきさまなり、さて青野原にて、

こゝはしも青野原といふめれと草木を見れば、もみぢありけりうぬまにとまる、

廿六日、さそ川のわたりす、こゝもかの名殘にて、そこら並木の松ども、一丈あまりも高き枝どもに、藻屑のかゝりて、目さまし、大久手に來てやどりもとむ、今日は風ひきて、こゝちあしければ、何もいはず、

廿七日、夜のはとより雨ふる、おき出で、女、

雨ふりて寒さも寒しおおしくは、今日はたゝすてなほとまらばや

つふやきをるに、すこしは晴るゝやうなれば、やどのあるじの、てけはよししくなぞ

いふにたち出でぬ、さどをはなるより山路なり、なかばこゆるころ、又ふり出で、
寒し、やうくわな、き出でし歌、

みのちゆく袖さへさむくまぐる、は木曾の御坂に雪ぞふるらし

午の時ばかり、大井の里につきぬ、雨はなほやまず、つかれもさむくもあれど、故郷近
くなりぬるま、具したるもの、まきりに急ぐこ、ちなれば、中津川をも渡りて、お
ちあひにとまる、

廿八日宿を出づるより、おさをやまのさかしきに、夏のころ蛇のぬけ出でしとて、谷
といふほどの谷は、大ある木、いはほせもながれ出で、道はやうくかたばかり、
残れる、人の家は屋根のみ見えて、埋れたり、橋場といふより、東なる山路へわけ入る
に、まことに心細し、菅原山の傍なる大たひらといふ處にとまる、

廿九日、み山のことなれば、霜は雪のふりたるやうなり、流は皆氷りたり、今日は九月
盡日なれば、

もろどもにゆく秋ならばわがかへる故郷まではいざといはまし

飯田につきて見れば、ゆかりの多く侍りて、人々つせひて酒肴もて来て、うちかたら
ひつゝ、のみくひす、日の暮るればとまる、

故郷へなかばかへるこゝちして旅つかれこゝまづ出でにけれ

神無月一日、今日は家に歸り着く日なれば、迎のものも出でぬべしとて、例よりどく
おきしが、よこらの人々、おくりにとて来ませり、山吹の里まで来しに、迎の人々三十
人ばかり、うちつせひて来ましたるが、わりこ盃なせとり出で、ひさしくてあへる
はぎとどなせいふほど、日もくれぬべし、はや乗れといふに、出でたちてゆく、家
近くなるほど、又迎にとて、わが京にぬしうち、うまれたるうまごひまごらひさつ
れて、誰もく来ませり、いとにぎはしくて、かへりつせぬ、

伊丹より須磨明石にあそぶ

二月廿七日、香川かけきのいはく、津の國なる伊丹てふ里より、去年も今年も、よこの
京へのぼり侍らば、うちつれまかるべきよし、たびくいひおこせしかば、いざやと
そゝのかされて、いでたつ、長岡をすぐるどてよめる、

春日すらゆきつくされぬ里なれば、長岡としもいふにやあるらむ
よこら花の散るを見て、

君によりおもひたちぬる旅なれば、散る花見るもたのしかりけり
日のくるゝほど、芥河の里にやせりもどむ、

廿八日つとめて出でたつとて、

春の夜はあくた河原の浪まくらねたるかひなきこころすれ

瀬川の里よりましかね山のうしろなる櫻井谷にゆきてつゝこの花を見る薄紫あ

る花にていと高き木をも岡のかぎり咲き渡りてゆく目もおよばずかげきの

津の國のさくら井谷にきて見ればつゝじが花にうつもれにけり

といふをさゝてわれもまた

松見ても世に似ぬものを宮やまの木の下のいゝいろのことある

さてゐなの圓通庵に入りて物あそびやがて伊丹なる大塚氏のかこへるなり處

に入り常はすむ人もなければこゝらいふせきをこのころそなたのため草な

どかりそけ侍りどあるといふ竹の青垣油水の心ばへきど或は高きのも櫻つき山

の柳春を深めて見ゆれどさすがにあらしおきつる名残にさびたるかたもさしま

じりてけしからずあはれにおもしろし

廿九日隣のかきはより山吹の見ゆるを

くるとあくど見る山吹の花なれどこなたの庭にあらばどぞ思ふ

寛原のもとより牡丹の花に歌をそへておくりけるに

我庭に今朝さきうめしふのみ草ふくはあらぬいろあはれをも

どなむ侍るやがておとらぬのへしととてうちをたふくはいでこそすいてさばうち

はあれておもふまはしく敷さはによみやうをあなやうるまどいばせむもあへり

ては管の根の長さ日くしたるまされくさばやとておのがじりあきつらねたる十

首の歌

手折るしこのはつはなに君がらのゆき見まほしきふのみ草あな

さくらちる春はくれむとまほはにさきで匂へるふのみ草あな

うつせみの世にさき出でし花どとはるけても見えぬ深見草あな

さうりさへひさしく見れば色香のみとめあははあらぬ深見草哉

わがおもふ人によるへて見る時はこひしさをさるふのみ草あな

花は昔わたにさくてふならばしも知らずにはへるふのみ草あな

春の日と二十日のさねて見たれどもこめつらなる深見草あな

見るは途に春はすくなくなりぬるとうつる色なきふのみ草あな

あくぞよみて持たせやりぬ今日ばうちよして題と出し歌よまむとて花發風雨と

いふとはじめにて

花さのり風なき日だにあらなくにうららかにし雨はふりきぬ

三日はあたりなる山もど何がし亭へゆきけるに、はじめの離れそびなりとて、人々ともどもに酒なごたうびける。さてこのわたりの所々を題に分ちて歌よむ。有明山、天津淵、三本松、櫻崎、社、鳩垣内、猪名寺などなり。天津淵と

わらゆころつらめときつる猪名河の天つ淵にやまふきを咲く

一日人々にいさなはれて、中山寺へまうづ。ある池といふ所とすぐるに、ひるむしるといふ水草しげりてありしと、若き女のありける茶店にたち入りてやすらふはどるげき

蘆火焼こやのしのやのけりしきにひるむしるとも敷せてしかる
といふに、

暮はてば又ころとほめ打はらひひるむしるとはしきてまたあむ

こやのいけは、あへりにとて、まづ心ざせし中山寺にいろく、さてまうで、見れば、とがみめぐるまに、いとたふとくありがたうおぼゆ。うしろの山にのぼりて見わたすに、有馬山、武庫山など南にけちらう、すこし東さまに難波大城はのしるく、あるは小波の里、目の下に、村よりすべて見ゆるのぎりの田畑は、麥穂と花のおちたるす

いな種ばりなれば、たゞひたみどりにて、はるく、紀の山つらなれるこなたに、又ひどきさうづ高う海原のはさまれたる水とも見えすらし、常は珊瑚の色して青みわたれ、ば、さはだちたるに、舟の波のしるきあをえあるまじきと、今日はあへく

にうちあすみて、山と畑との色にもたちおくれたるが口としなど、人々いひあへりさて酒なごくむはせ、梢には蟬の聲して、すべて夏めきたるに、藤の花くみの花など春知り顔あり、どくしつ、あへるさの道は、くれはてたるに、風すこしうちふき、るひ心には、いとこ、ちよくて歸りぬ、

十三日、こよひ又題とわらつ、雨後春月

ふるとのみおもふ雨しもやみつらむらげこそ見れ春の夜の月

又池水にうつりたる月の空にも似ず、いとしづまりて、さやあなると、ふと見出で、人々よめる、まづあげきの

池水のふらさこゝるとこよひころうれしきものと思ひ知りぬれ
といふときいて、

池水のそこに出でたる月あけは見ぬもの、こゝめづらしきうな

十四日、今日は須磨明石のあたり見て來むとて、あげきもろともおもひたちて、その

いさぎ俄なり、さて出でたつに、人々南野といふ所まで、おくりしてわられぬ、これよりゆく、西宮なる小西惟幾の許にやきる、さてたゞにやはとて、うのわたりの名所、角松原、廣田春月、うげき

うぐひすの鳴音はひまもなありけりつぬの松原まばらなれども
来て見ればおほろおほるとはてもあき廣田の野への春の夜の月
れなじこゝろと、おれも

我見てののちのすまみひるた野の野のへとてらす春の夜の月
猪名の野をまた夜とこめて朝たてばつぬの松原うぐひすなきぬ
十五日つとめて出でたつ、あしやの浦に来て見れば海のおもて青むしろしきたら
むやうなり、

あしやがたなきたる朝と見わたせば沖こぐ船はたゝるるがこぞ

やがてみぬめの浦にいつ、これより布引の灘見むとて、わきう濱より右の山へ入り
もてゆけば、廿町ばりののぼりて、灘あり、上より見おろすにて、いと類なくころあれ、
山とよみおちくるれとはまがはねと灘は水とも見えぬありけり
さて左の坂とくだりにうち越ゆれば、女灘あり、これはうへの男灘に、くらふれば、た

けもいさゝのひさく、みあざる勢も弱し、されど中らにさはりもなく、うちあはれて、
いどきよらなるは、女灘てふ名にも、又布引てふ名にも、うちあへりといふべし、さは
おれど、なほ心とまるは、上のを、しきにころ、うれより西とさしてくだりければ、生
田にいつ、おく、兵庫にとまる、

十六日辰のころたちて、ゆきく、て鹽やの安養寺にたち入り、晝寝しつ、さて飯を
たうへ出でひとするに、まもりある、法師のいはく、あるじの歸り来て、うこたちの歌
はと聞ひ侍らひに、答へむすべなし、何にまれ、おいつけおき給へど、硯紙などどうで
たり、げにどて、うげき

紀伊のやま明石の浦とわがものとして見る人もある世なりけり

どあいつくごと、と出で、垂見をすぎ、明石の舞子の濱にて休む、綱引すると、たちより
て見れば、あますてふ魚の子なりとて、細してあめる綱のうさぎ、布もていと長く、莖
めあしたる中に、一手ばりも入り來たると見れば、三寸ばりなるに、海紅のひの
りあきて、ほろやうに、形は茅の葉のうらがれたるに似たり、桶にうちこめば、とどり
あがりて山おろしにさやぎたてると、ちせり、又の名はいかゝることともいふと、磯
つゝま皆さるぬせむとみつゝ、ぞゆく、申の時ばありに、明石龍谷寺にいたりとまる、

十七日うちもりて小雨降る、淡路島のけしきなき、あゝる日ころはとて、たち出づるに、あるじ愚問長老、此處の歌よみ人方晴ともなひ、ともに出で給ふ、まづ濱べにうちつらねて、なやとしつらひたるに入りてみれば、いくばくのうまど焼ならべ、昨日のいかること鹽ゆでにして、ちひさきふせこめきたるに、あちち入るゝなりけり、やがて都へものぼせけるにや、さる籠るがら市にひさぎ、あるはうりあるく、みられたり、いみじうなまぐさければ、いろぎ出で、海の面とみやるに、けちのき淡路島も雨にらすみ、紀の山もとも絶えてみえず、磯ぎは、浪たちて、くさくさの藻くすたゝよへり、おのゝ歌よめるに、

おきべよりさしくる沙やみちぬらむ磯うちこゆる浪にさるなり
くみまとの如きもの、いくらとなくうき沈む、こは蜻蛉のうけなるべし、又は外のなりやなど方晴のいへば、かげきの

わたつみの底に沈めるたこつばの我とのがねぬ世にころ有けれ
なごいふゆりうつふせたる意とひさあぐるまに、いよ、底つゝたに、いまりこみて、おはれにおぼえての事、日暮るれば、たちへりて明日は人丸大明神の祭なりとて、大蔵谷のあたり、いとにぎはしげなり、こよひは手向の歌よまむとて、あ

あちたる題十五首、幾月越聞、うげき

須磨の關わがこえくればありわけの月は明石になほのこりけり
むたく

わけはていさゝはこえむ須磨の關浪まの月をゆるしゝねぬる
風破旅夢

草まくら旅の夢ころなしけれ夜たゝあらしにふきとられつゝ
みやこにて寝し夜も風はふきしゝと夢路にきほふ音はせざりき
嶺林猿叫

風こしの松原がくれやまざるのさけふこゑさへみねづたひせり
高雄山みねの木すゑに鳴く猿のこゑいとなきは雨にぞあるらむ
翠松違家

山松の中にすまひて世とらみのさまともみえぬすまのうらひと
枝のはすめぐりの松のふらみどり子の日にあける人やすむらむ
山家人稀

あがやどの垣根がくれのつゝらとりくる人あらばまつ人にせむ

うれしくもまたわびしくもあるものは人の言せぬ山べなりけり
野寺僧歸

あたふ山まきみが原にくらしけむさうのとわくるそみぞめの袖
法のためつむ花なれどまゐすがたにへる野寺のみちやのゆけき
田家見鶴

みたやもりひたばなうちう住の江の淺澤ぬまにたづさわぐめり
あみつけのさのゝ田の面に住とれば手飼のこどもなるゝ鶴あゐ
橋路

柴ひどの常いかならむ山路にて日のくれたるはくるしありけり
いゝばありふらく入れば山がつがらへる家路の暮はてぬらむ
晴後遠水

山おるしあめの八重雲ふきにけりあらはれわたる武庫の川みづ
和田の山みねこえくれば朝霧のはれてぞみゆる諏訪のみづうみ
滄江雲低

天雲のたるみのうらのあさぼらけいまだわられぬ紀路の遠やま

まつら湯はるけき沖にゐる雲はもろこしよりやうかびいづらむ
漁舟連浪

夕日さす藤江のうらを見わたせば阿波までつらくあまのつり舟
雲井までたちはなれたる隙もなしあかしのあまのつり舟
江雨鷺飛

みしま江の浪にぬれてはゐる鷺の雨にはいかでたへぬなるらむ
こさめふりくるゝ入江をたつ鷺はねぬべき杜やおもひいづらむ
夜涙餘袖

ねられねばかたしきかへし夜半の袖右もひだりもぬらすころ哉
さよ中に物おもふ袖のなみだこゝろ世のうさよりも数まさりけり
憂喜依人

おほかたは楽しかるてふ世の中をなすうさものに思ひとりけむ
うれしかる事も多しときくものをうしどのみ知るわが世何なり
竹契退年

むかしきは竹の心と知りながら千世ののちをもちぎりけるかな

うつしうゑて朝夕見てむなよ竹のよながきよはひもし習ふやと
 十八日よべよりぶりついきたり、晝すぐるころ、すこしあかりたるほどに、御祭見に
 ゆかむとて出づ、くさくさのつくり物など、うるはしげなれど、雨おほひしたれば、お
 ぼつかなし、御社は岡の上なれば、のぼりがたきに、雨さへいみじうふり出でたれば、お
 はるかに拜みたてまつりて、かへさのついで、忠度の御墓にまうづ、まづ三本ばかり
 り物ふりたるかげに、石ふみたちて、玉垣しわたしたり、前にたちたる石の面に今も
 忠度のしるしに、残る石の表にきざめる名こぞうちせぬ、松平山城守忠國とあり、う
 しろにたてる大なる碑に、からぶみしてひたかきにかける跡あれど、うち埋れたる
 に松の葉さへいみじければ、たちすがりてもえよまず、げに此主は、かの世のさわぎ
 のあるが中に、いとほまれ多く、歌さへ名高く、木の下陰を宿とせばなご、山がつまで
 もいひはやせり、さてかへり来て空のけしきを見るに、やがて晴わたるべう青みた
 る絶間もほのめければ、見合せて明日なむ、たちぬべく、いひかはすめる、さる間に長老
 みづから盃もち出で、やといかにつれづれにおはすらむ、ひとつのみ給へ、さて歌
 よみしたり、今はとて歸らむものか、まてしばし明石の月のはるゝころまで、かくは
 ろこたちの立いをきし給ひげなればなり、かへすゝもよき影見給ひて後こころな

ぞのたまふほど、暮わたるに従ひ、ますく晴ゆく空見だして、やがてこよひころ
 みもてなしの月あくばかり見侍りて、いよゝ明日なむたち侍らんなど、すまひい
 へば、さらばともかくもせよかしといひやり給ふ間に、誰もくうちあひてふしぬ、
 十九日杉戸おし開けば、有明の月、松のむらだてる梢のうへにしらみかゝれり、立の
 いうぎ何くれとするほど、よべのかへしがてらに、
 たちかへり見ざらむものか、あかし海浪にのこれるありあけの月
 どかいつけおきて立出づるに、浪のうへ心よく晴わたり、なごりの雲とこころく消
 がたなり、ほそなく舞妓の濱に至り、臨潮亭に入りて酒くむほど、かのいかなこと
 を、をりよき綱引やど、いとうれしくて、ともなる奴にかたみもたせやりて、いささば
 かり買とりて、或は汁又はみそをいなどに物して、たべくふにいとうまし、盃とりて
 かげき
 常はあれを今日ハ酔ませみさかなは淡路の島とみるとなりのりそと
 こは濱づたひひろひ來しなりのり海松二ふさ、かたへにあればなり、かへし
 いで今日は此海べたにころふしてゆかてやむとも酔ざらめやは
 をどつ年のやよひの末、二人嵯峨山にねて、初音きゝし郭公のまどるも、今日のむつ

びのたのしさにくらべて、數にもあらざりけり、あなおもしろ、すくせにやあらむ
 なせまでおもひをれば、常にもがもな渚こぐてふ古き歌さへ、あぢきなう身にしみ
 て、いみじうなむめられぬるは、なかくなりや、さて濱路をゆきく、て、かげき
 ま袖ふり舞この濱にみちはわれ、どうらづたひしてみるめ拾はむ
 といふをききて、

あかしがた拾ふみるめの盡せねば濱づたひしてこの日くらさむ
 ことさらに長き海松をば、ともなるもの、になひのはしに打かけく、するを見て、
 かげき、さすがなほ都の方のこひしさにさのみあがめはかけずもあらなむなをい
 ひつゝ、鹽屋の里にいで、

名をきけばこゝは鹽屋の里なれどけふりもたゝすくむ人もなし

源光寺に入りて俳人芭蕉の塚を見れば、見渡せばながむれば見れば須摩の秋とき
 ざみたり、さてあたりの茶店にて飯たうべて今はいかゝる牛にもつきぬかれと
 皆いひ笑ふ、こは今、西須摩の串矢元義といふもの、處なる麥にてもものせし磯馴味
 贈といふもの、買つるに、此あるとさるかたのすきものにて、物ひさぐたよりに、ゆき
 かひのことのはと、一とちの冊子にこひ記させ、おしまつきに打ひるげおき、我らに

も何ぞかきおけとこふ、かげきいはく、歌よみにも侍らば歌かくべく、俳僧師にも侍
 らば、はいかいかいつくべう侍れせなせいひつゝ、筆とる折しも、こやのませよりつ
 らさしのべて、もうとほえたるに、うちたまげて、へつた腹つきぬかれけり牛の聲と
 かいすてゝ、にげきたるが故なり、

廿日夜をこめて兵庫をたつ、残れる月いまだ光れり、湊川にきて見れば、廣き河の水
 はなさに、みをつくしたてり、かげき

ほのく、と見ゆる湊のみをつくし夜の明わたるしるしなりけり
 といふに我も、

水もなき湊かはらのみをつくし日でもつゝいさししるしなりけり
 又生田の森を見やりて、

ほど、ぎすはやあきぬらむ津の國のいくたのもりのしげる梢に
 さて濱つらをゆく、かへり見すれば、和田の岬もはるかになりて、近き浦々はい
 どのどかに晴わたる、已すぐるころ西の宮に至りて、休ふ、ひつじのかしらになるま
 で、ねすぐしたり、今は伊丹もいと近しとて、ともなるものは、さきにかへしやりて、廣
 田の社へまうづ、このころは中山寺の御佛の御戸開きりとして、難波わたりよりまぬ

つどふ人、道もさりあへがたし、さて御社の松原いと清らなれば、ついでやすらふやがて汗なともかわきたり、こやの里の半より右に入りて伊丹につきぬ、廿一日夕つかた、あるじ寛柔にいざなはれ、初螢見ばやとて猪名川のはどりにいつもうちしき、そがうへにちらび居、茶たきてのむはせ、いたく暮わたりて、物の色も見えず、さて螢見出でんと、おのもく川くまより大空かけて見わたれど、雲間の星のみわさむける風も身にしみ石のかせくしきも、をるにたへむたく、いざと立あがりて歸りく、川面に小河一筋あられたり、こゝいかに渡らん、寛柔にはかはるせのあきいもよく知りてんものを、かゝる道にいかでなせ口々いへば、どころにはすめど、河瀬の深し浅し、日毎に来ねば、知らぬなりけり、こは此程の雨のしわざにこそ、いと暗ければ、今は猶引かへさんもおぼつかなし、いざ渡りてよとあれば、淺げなるかたふみ渡る、さてかけき

ひさかたの天津の里のとも、ま火は星かはたるとあやまたれけりといふに我も

猪名川をかちわたりしてたづねれど、螢はかけも見せぬなりけり

大川の板橋打渡り、堤のうちにくれば、溜れる水際に光りて見えたり、あやと驚かれ

てなは見れば、かたへの田面にも、ほのめけり、又かしこにもと、うちのぞみてすいりげば、伴なるわらはの先にたてるが、心得顔に灯さしつけたるも、いとをかし、かけきともしびの影はや隠せわさ、夢のはのかにてるはほたるなりけりといふに、あきいの寛柔も、ふく風もまだ寒けれど、みやこ人さませる野べはほたるとふなりと口々いふをきいて、

たづねわび今はどかへる道のへに草のはつかにとふほたるかき空とぶを扇にうちとまらせて、興じつと歸りぬ、一夜雨ふりしめりて、いとさうくしければ、題を出して歌よまむとて、雨夜藤花をおもふといふを皆よめるに、かけきよもすがら松のしづくのひまもなしうつりやすらむ藤波のはなとよよめる、われも、

いもならば笠ともいはむ春雨に夜ひとよぬらすふぢなみのはな
廿三日さきつ日より寛柔の牛の繪に讀こはれたるを、今日歸る日なれば、かいつけむとす、まづかけき

身をわびてうしどないひそらし見れば、心に角はなはなかりけり

と予かいつく、我はふつにいで來ねど、とかくひねり出で、
誰しかもはなてる野べのまだら牛まだなつくべき草も見ぬぬを
としるしおきて、雨ふりげなれど、昨日よりおもひたちぬる心やみがたく、しひてい
とましける、人々ろれく、わかれの歌數多し、いそぎければ、皆もらしてかいとめず、
すべてのかへしにとて、

袖ぬるゝわかれとかねて知らませば久しく人にあれざらましを
ある人馬のはあむけにとて、火打袋をおくれるに、

打出でばやがてもひこそ移りなめこれなむ君と見つゝしのばむ
さて日も半空なれば、いろぎゆくほど、はれみくもりみ、長月ごろの如く、をりくゝう
ちしぐれて、あつき事は、五月頃の空にも、をさくおとらず、衣汗ばみくるし、萱野の
右なる岡のうしろの萱野三平重實の墓にまうづ、碑の文を見るに、おもてある萱野
三平之墓といふ六字は、百拙和尚の筆なり、めぐりにきざめる文は、南湖堀正修の作
れるなり、見るくもろとも涙もよほすにつきて、

かねてよりすてしいのちをまづすてし心の中予かなしかりける
あきた川まで來てとまる、

廿四日つとめてやせりをたち出で、やがて古曾部なる能因の墓に物して、山づた
ひ花の井にたち寄る、こはかの法師の眉しるたへに我老にけりどよまれし所なり
といふげによしありげなる清水にて、人の汲まざれば、すみわたれるに、かたへの石
文の文字は、うちつふれて、いかにすれども、よみわかず、さてかげき、

なつかしき人のうつせし山の井のむかしの水にかけを見るかな

我も又かげをのぞみ見るに、眉のしらげ、日にさへやけくろみければ、かくもやあり
けむと、あやにおもはれ侍りて、

山水にうつれるわれをいにしへの人のかげかとおもひけるかな
なをいひしろひ日くるゝほど、京にかへりつぎぬ、

夢宅日記 終

